

日銀の新総裁に東大名誉教授の植田和男氏が選ばれたとの報道が流れている。国会の承認プロセスがあるのでまだ正式決定ではないが、この人事がひっくりかえることはないと思われ、今回はこのテーマを取り上げたい。

個人的な話で恐縮だが、私は植田氏とは大学3年生の時から50年の付き合いになる。一緒に大学院を目指し、ほぼ同じ時期に（大学は違いますが）米国に留学し、そして東大経済学部の教員として長い期間をともに過ごした。彼が大学院の研究科長の時、私も副研究科長として大学行政に関わったことがある。

ちなみに植田氏は静岡県出身である。旧相良町だと記憶しているが、これは確認したわけではない。いずれにしても、学者からは戦後初めての日銀総裁であり、活躍を期待したい。もともと、米国や英国などで

東京大名誉教授（国際経済学）

伊藤 元重

論壇

は大学の研究者が中央銀行総裁に就任することもあるので、日本もそうした世界の常識にやっとな追いついたとも言える。

そうは言っても、日銀総裁に課された課題はあまりにも困難で難しい。黒田総裁の下で異例とも思える量的拡大や金利操作が続けられており、そうした異例の状態から正常に戻るのは多くの困難が伴う。黒田

日銀総裁の責務

の過度な金融緩和が金融市場を歪めてきたこともある。この歪みは是正なくてはいけない。

日本銀行は、一方で市場と対峙しなくてはいけない。他方で、政治との関係が問われることになる。日銀が拙速に動けば金利や株価が激しく動いて、金融市場に動揺が走る。しかし、日銀の動きが遅すぎても、市場の歪みが拡大してしまう。黒田総裁

総裁の政策が間違っていたというわけではないが、あまりにも大規模な金融拡大であったので、それを脱して金融を正常化するのに多くの困難が伴うということだ。

こうした変化が求められるのは、一つには世界経済の流れがデフレからインフレに大きくシフトしていることがある。また、デフレ対策とし

は金融の正常化に慎重すぎたようにも見たので、市場は植田新総裁に変化を期待している面も大きい。そうした市場の期待にこたえつつ、拙速な変化をしない。新総裁にとって市場との対話は非常に難しい課題だ。

もう一つの困難は政治との距離感だ。黒田総裁の時には、安倍総理との間に盤石の関係があった。しかし、

これは通常の日銀総裁と政治の関係とは言えない。黒田総裁の前任の白川総裁は政治との軋轢の中で、任期を残して辞任した。また、その白川総裁の就任は、さらに4年前の総裁決定のプロセスで別の候補が国会の承認を得られなかったことを受けてのものだ。

植田新総裁も、国会での厳しい質問にさらされることになる。そうした質問の中には、我々のような専門家には首を傾げたくなるようなものも少なくないが、日銀総裁はそうした質問にも丁寧に答えることが求められる。市場が大きく混乱することもあるだろう。金利の急騰、株価や為替レートの乱高下、更には日本国債の格付けの引き下げによる混乱。いろいろな混乱が予想される。日銀総裁はそうしたあらゆる激変への責任を問われることになる。大変な職務であるが、健闘を期待したい。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。